

■ フォト・エッセイ ■

丁子（クローブ）のふるさと —— 神秘的テルナテとティドレ ——

写真・文
大津伸子
Nobuko Otsu



テルナテ島からマイタラ島とその背後のティドレ島を望む

マルク諸島テルナテ島の山間の滑走路に小型機は滑り込んだ。三年半振りの景色に目をやると、背にガマラマ山の凜とした変わらぬ姿があった。

一九九八年の経済危機に端を発したスハルト政権崩壊を契機に、キリスト教徒とイスラム教徒との衝突―実は政治的衝突―の結果、北マルク地域はマルク州から分離した。新生北マルク州の観光促進の一環として初訪問したときは、政府主導で案内され、心残りがあった。

世界に名を馳せた香料諸島マルクの名は、マロコ・キエラハ（山々が多い島の意）に由来し、スパイスの原産地として七世紀の唐時代の書物に「ミリク」の名で登場する。特にテルナテ、ティドレ、マキアン、モテイ、バチャンの五島はオランダが侵入するまで丁子（ちよしインドネシア語でチェンケ）の原産地で、五島以外には世界中どこにも産しなかった。先に果たせなかった樹齢四〇〇年といわれる丁子の老木「アフオ」に会いたい。高さ約三六メートル、樹幹の周り四メートル超、かつて六〇〇キロの丁子が採れたそう。

空港から車で一五分のテルナテの街に入ると、焼討ちにされたキリスト教会の無惨な姿はすでに無かった。港近くの乗合バスターミナルと市場は他所へ移転し、跡地には急ピッチでショッピングセンターの建設が進んでいた。ここだけジャカルタの一部が一足飛びで来たようだ。



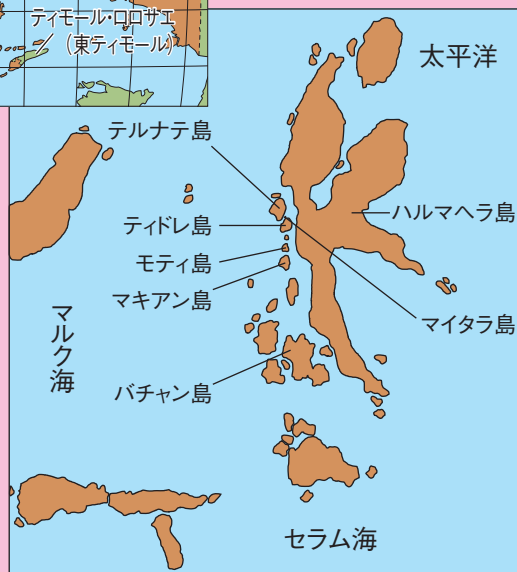
テルナテのパブラー飛行場の背にそびえるガマラマ山（1721メートル）



テルナテ島ガマラマ山中の丁子摘み



摘んだ丁子とナツメグを頭に載せて運ぶ



一五世紀までヨーロッパ諸国は中国、インドやアラビアの商人を通して香料を手に入れていた。一六世紀に入ると直接獲得しようとして死を決して、一五一年のポルトガルを皮切りにスペイン、オランダ、そして英国がやってきた。海に囲まれた一周四五キロの小さな火山島のテルナテとティドレのスルタン（イスラム君主）は始祖を同じくし、丁子貿易の競合相手だった。ヨーロッパ勢力の到来により、丁子を巡って互いに争わせる政治的戦略の犠牲になり、そのしこりは今に尾を引いている。

オランダの独占の目をかいくぐり、アフォという名の男が、ガマラマ山頂近くに丁子の樹（熱帯常緑高木）の苗を植えた。樹は成長しつつ、香料を巡る下界の血生臭い争いの歴史を見つめてきた。麓の村マリクールブルーまで車で行けるが、そこからは徒歩。入山許可を得、初めてだと張切る観光局スタッフ二名を伴い、村人の案内で狭い急な山道を登る。今度こそ会えるぞ、とワクワクしながら樹間を抜ける。一時間程で出先小屋が見え、丁子摘みのおばさんたちに出会う。昔と変わらぬ手摘みだ。七月は収穫の盛りで辺り一面に香りが立ち込める。淡いピンクがかった白の花も香りを放つが、生の蕾は香りが凝縮したドライのものよりふあつとしたほのかな甘い香りがする。

ここから先は道なき道をほぼ直線に登る。ハアハア息をつく三〇分の登りでスタッフのひとりと夫がダウン。さらに流れる汗を



アフオの子供の樹



ティドレ島トフラ要塞で見つけた珍しい黄金のクモ



温泉際の老樹の枝に願いを結ぶ

拭いながらひたすら登り続ける。村人は慣れ親しんだ山をスイスイ進むが、私たち二人は一〇分歩いては五分休む、きつい登りだ。ほおつとしていると足を滑らせる。

「アフオに会えた外国人は、スイス人とアメリカ人のカップルだけ。一九九一年にスイス人が山中で行方不明になったまま」と聞き、急に怖くなり、辺りの気配が気になり出した。あと二キロと言われたものの体がついて来ない。心臓がバクバク、吐き気を催し地面にしゃがみ込んだ。しよげた様子を察してアフオの三人の子供の樹に会わせてくれた。帰国後、アフオが九年前に倒れていたことを知るが、なぜ村人は案内しようとしたのか。樹の根が重要だと語ったのを思い出した。アフオはまだ生きているのだ。

この山は近年、一九八三年と一九九〇年に大噴火している。山を畏敬し、時々爆発する神の怒りを鎮めるためであろう、歴代スルタンは供物を捧げに登頂してきたが、現スルタンは老齢とジャカルタ住いのため疎遠になっている。情報によると、登りに六、七時間、下りに三、四時間かかる。人を近づけさせない畏怖する山なのである。マイタラ島をはさむティドレ島へは、朝なぎの海をフェリーで二〇分。島を一周する道路ではほとんど対向車に遭遇しない。背にマイタラとテルナテ、前方にハルマヘラ島を展望できる島の東側のソアシオ村の高台にあるトフラ要塞はほとんど崩れ、一



グルワバンガ村の伝統家屋内のソウオイの親子



不思議な力を持つ初代スルタンの毛髪で作った王冠。毎日お供えし、伸びる毛髪を犠牲祭日に刈る



丁子の天日干し。薄緑色が黄ピンク、赤茶色に変化する

部が観光史跡になっている。一六世紀後半に築かれたとされるこの要塞は、その後丁子を渴望するヨーロッパ諸国の奪い合いの場となった。ここに佇むと血生臭い光景が浮かんでくる。要塞跡を下った海岸際に岩からチヨロチヨロ湧き出た温泉があり、傍の樹の枝に布切れがいくつも結んであった。願い事を託す習わしとのこと。イスラム教が厳しいティドレで自然の神への信仰に会うとは驚きだった。

古い慣習を守っている村があると聞き、興味津々キエマトウブー山（一七三〇メートル）の中腹にあるグルワバンガ村に向かう。緑の木立に囲まれ、空気が澄み、おいしい。急勾配の小道を登って行くと、ほのかな甘い香りが漂ってきた。正に天日干し中の丁子だった。待つこと二〇分。コラとよばれる木材と竹で造られた伝統家屋に招かれた。妙な被り物とアラビア風衣装に身を包んだ主はソウオイと呼ばれ、祭り事を司る人のようだ。ソウオイが亡くなると親族集団の長老が協議し、次のソウオイを決め、コラの建替え儀式を行う。古からの親族社会構造が、イスラム教伝来後も継承されている。もう一軒のコラのソウオイは社会共同体の祭り事を司る他、宮中の諸事の件でスルタンの相談に乗る。村名の「グルワ」は池、「バンガ」は森の意だが、池は今は無い。テルナテ、ティドレ両島とも神秘的で、丁子の香りの如く益々魅惑する。（おおつ のぶこ／フリーランスライター）